

恩師を偲んで

大鳥先生の三つの顔

日本医史学会理事 大村 敏 郎

医史学の巨星落つ。日本医史学会にとつても、慶應義塾大学の医学部にとつても、大きな存在であつた大鳥蘭三郎先生が去る六月八日亡くなられた。

先生は文字通り顔の面積も広がつたが、人とのつながりを大切にされた方だったので、ご交際の範囲がとても広い方だつた。

六月七日付けの「週刊朝日」に大きな活字でお名前が載つていた。奇しくも死の前日の日付である。旧友で今年故人になつた司馬遼太郎氏の講演の中で取り上げられていたのである。先生は一九〇八年オランダはハーグの生れ、かつて長崎に医学校を作つたポンペの立会のもとに生を受けたと先生から伺つていた話を覆すような記事だつた。それに反論する原稿（「医学のあゆみ」一七八巻四号二四四頁に掲載）を書いていた時刻、先生は最期の時を迎えられたのである。

幼稚舎から医学部まで一貫して慶應で育ち、オランダと慶應は先生の生涯の誇りであつた。医学部を卒業しても体の御不自由を意識して、臨床には進まず、一九三二年、恩師藤浪剛一先生の勧めで理学的診療科（今日の放射線科）に籍を置いて、医学の歴史に取り組む日々が始まつた。

大鳥先生は三つの顔があつた。その第一の顔は真摯な学徒であつた。わが国の解剖学用語の変遷、中国の西洋医学、そしてシーボルト資料の研究、などを手掛けたのち、生涯のテーマになつたオランダ商館日記の医学の部分の研究に取

りかかった。これが日本医師会の最高優功賞の第一号（医師会長は武見太郎先生だった）、慶應義塾賞、野口英世記念賞、オランダのオランエ・ナツソ・勲章につながるのである。独学でオランダ語を身につけ、一九六九年秋オランダでのシ
ンポジウムに参加して、自分の生地を尋ねた旅は生涯の思い出であったとよく話しておられた。

教育面では一九四五年から慶應義塾大学の医史学の講義を担当された。医学部開講以来ずっと続いている講義だが、その四代目である。一九六六年から教授に就任された。学会活動では小川鼎三・緒方富雄両先生と並んでオという字で始まる名の三羽鳥と呼ばれ、小川先生亡き後七年間日本医史学会の理事長を勤められ、引退して名誉会長であった。

大鳥先生の講義や講演は真面目で、丁重で少し古い敬語がよく登場した。弓道部というご縁で——先生は弓道部の顧問だった——学生時代一回を除いてあとは全部講義に出席したが、中身が理解できるほどこちらが勉強をしていなかったから、せっせと黒板消しのお手伝いに精を出していた。その私が先生のご指名を受けて後任として一九八四年から医史学の教壇に立っている。本当は平河町のお宅に呼ばれて、おいしい鰻をご馳走になってその気にさせられたのである。

先生の第二の顔は粋な慶應ボーイであったことである。私が存じあげているのは三十年ほど前からであるが、若い時から洒落たシャツに蝶ネクタイ、それも自分で結ばないと気が済まない、そしてハットにステッキ。これだけ並べると颯爽と感ぜられるが、実は足元が危ない。自称ステッキボーイという仲間や弟子が支えて差し上げていた。

長いこと医学部の学生部の委員を勤められ、滅法記憶がよく、気さくに声をかけてくださる先生であったから学生の評判も人気も高かった。夏の医科学生体育大会にはかならず応援に駆け付けられ、慶應だけでなく他の医学生たちにまで名物になっていた。

先生のスポーツ好きは有名で、自分でおやりになるのは弓道くらいのものだが、野球の慶早戦、ラグビー、ボートの観戦には夢中になられた。晩年寝付かれてからも、見舞いに伺った者はそちのけでテレビに見入っておられた。音楽も大好きで四十年以上にわたってN響の定期会員であった。

第三の顔はやんちゃなはずらつ子のものである。講義の時の真面目さとはうって変わつて、痛烈な毒舌が飛び出す。しかし後に残らない。独特の人懐こい笑顔がフォロウするからである。先生の毒舌の対象にならないうちは一人前ではないと思つていたくらい、気を許せる相手には激しかった。それなのに言われた方は嬉しくなったものである。

皆の仲間に入つてよく飲み、よく食べた。先生は大食いである。それが祟つて胃癌で全摘手術した後も食べすぎてよく腸閉塞を起こした。慶應病院に入院した回数も十回をくだらない。その都度保存的に手術をしないで治つた。幸い癌の再発はしなかつた。

愉快な時の先生は、例えば弓道部が優勝した時などには自分の拳骨を口に入れてしまうというすごい芸を披露してくださつた。とても立派な医史学者からは想像もつかない様である。私は医史学と慶應と弓道部の三つの分野で先生にお世話になつたので、どうしても区別して書くことができないのである。

足腰が弱られて療養生活に入つて何箇所か病院を移動された。晩年の四年程は氣心の知れた弓道部の弟子の病院で好き放題に過ごされた。幸せな生涯だつたに違いない。

二十年以上前、手術を受ける時の先生の遺言があつた。「ぼくが死んだ時は弓道部の連中に棺を担いでもらえ。」それを何代も受け継いだ今年の弓道部員達が先生の希望通りにしてさしあげた。慶應義塾の塾歌が流れる中を偉人は旅立つていかれた。享年八十八歳であつた。

(慶應義塾大学医史学客員教授)